陶淵明「遊斜川幷序」考

三枝秀子

目次

Ⅰ はじめに
Ⅱ 「遊斜川幷序」に關する問題點
Ⅲ 「蘭亭序」と「遊斜川序」との比較
Ⅳ 王羲之の「蘭亭詩」と「遊斜川詩」との比較
Ⅴ おわりに

Ⅰ はじめに

陶淵明の詩文に關する論文はこれまでに數多く發表されている。それらの論考の功績に基づいて、陶淵明の詩文に關

してさらに多くの研究がなされ、そしてなされつつある。小論では、これまであまり論じられることのなかった「遊斜川并序」をとりあげたい。後に述べるように、この作品は、王羲之（321—379）の「蘭亭序」から始まる「宴（うたげ）」の作品の流れにある、または、『文選』の遊覧詩に相當する作品である、と言われてきた。しかし、「遊斜川并序」がいかに「蘭亭序」や遊覧詩と共通しているのか、またはどのように異なるのかという點についてはこれまでほとんど検討されていない。また、王羲之の「蘭亭序」とその詩に關する論考においても、この「遊斜川并序」については言及されていないようである。

川合康三氏はその著『中國のアルバ』の「うたげのうた」において、「うたげ」の主宰者の詠んだ詩と、その「うたげ」に招かれた客の詠んだ詩とを比較することにより「うたげのうた」の系譜の發端を定義づけ、さらにその變化の過程について論じている。陶淵明のこの「遊斜川并序」は、客の詩が存在しない。このことからするとこの作品は、川合氏の想定する「うたげのうた」の系譜には屬さない作品であると言えよう。

しかし、「遊斜川并序」と「蘭亭序」とを讀んでみると、そこに共通點が見られることもたしかである。川合氏はその著において、石崇（249—300）の「金谷詩序」、王羲之の「蘭亭序」などについてその構成を分析している。その分析に沿って検討してみるに「遊斜川序」も基本的に「うたげ」の作品であると考えて差し支えないと判斷される。その根據は次の二點である。

まず、この「遊斜川序」も「蘭亭序」のように、風光明媚な所に行き、酒を飲んだり、歌を詠んだりして樂しんでいることが詠まれている。次に、「蘭亭序」のその「うたげ」の主宰者である王羲之のように、陶淵明も序とそして詩の兩方を詠んでいる。たしかに、招かれた客の作品はそこにはないのだが、その他に共通している所もあり、「うたげ」の作品としてこの作品をとらえることも許されることだと考える。したがって小論では、「遊斜川并序」と「蘭亭」の

序や詩との比較を試みた次第である。

その結論は、陶淵明の「遊斜川序」は、「蘭亭序」と同様の構成をしてること、詩のほうは、王羲之の「蘭亭詩」と異なる構成がみられること、そしてこの構成の違いは、悲觀を樂觀に變えて詠むという、陶淵明の文學の特徴として考えられるのではないかというものである。

本論に入る前に、「遊斜川序」と詩の全體をここに示しておきたい。

「遊斜川序」

辛丑正月五日、天氣澄和、風物閒美、與二三鄰曲、同遊斜川。臨長流、望曾城、魴鯉躍鱗於將夕、水鷗乘和以翻飛。彼南阜者、名實舊矣、不復乃爲嗟歎。若夫曾城、傍無依接、獨秀中皋。遙想靈山、有愛嘉名。欣對不足、率爾賦詩。悲日月之遂往、悼吾年之不留。各疏年紀鄉里、以記其時日。

辛丑の正月五日、和やかで風景も美しくのどかな今日、二三の隣人と一緒に斜川にでかけた。川を臨み、曾城を望み見て過ごした。夕暮れ閒近、魴や鯉が鱗を躍らして泳ぎ、水鷗がおだやかな風に乘って翻り飛んでいる。あの南阜（廬山）は、昔から有名でなので、それを見てもとりわけ感動を覺えない。だがこの曾城は、そばに隣接する山もなく水邊の中に高く聳え立っているし、崑崙山の靈山の曾城を連想させるこの名もとても氣に入った。樂しく曾城や景色を眺めていたらますます興が增し、それで詩を詠んだのである。月日は流れるように過ぎてゆき、我が年も留まらず流れゆくことが悲しい。そこで、皆、自分の年齡と鄉里を書き連ね、この今日の日にちも記したのだ。

「遊斜川詩」

開歳倏五日　年が明けてもはやくも五日が過ぎた
吾生行歸休　私のこの命も終わりに近づいていく
念之動中懐　このことを思うと心が動じる
及辰爲茲遊　それで良い日を選んで氣晴らしにとこの遊を行った
氣和天惟澄　和やかで空は澄みわたり
班坐依遠流　皆 川の流れに沿って座った
弱湍馳文魴　緩やかな流れに魴が泳ぎ
閒谷矯鳴鷗　靜かな山の谷閒には水鷗が飛んでいる
迴澤散游目　氣の向くまま遠くの流れを眺め
緬然睇曾邱　遠くに曾丘を見る
雖微九重秀　九重に連なる崑崙山のように聳えてはいないけれども
顧瞻無匹儔　曾丘の周りにはこれに匹敵するものはない
提壺接賓侶　酒壺を抱えて友に進め
引滿更獻酬　互いに酒をついでは飲み干しついでは飲み干す
未知從今去　今日という日は過ぎてしまったら
當復如此不　またこのような機會があるのかどうかわからない
中觴縱遙情　酒を飲んでいるうちに心が樂しくなり

忘彼千載憂　　あの「千載の憂い」を忘れてしまった
且極今朝樂　　今はこの樂しみを極めよう
明日非所求　　明日はどうなるのかわからないのだから

Ⅱ「遊斜川幷序」に關する問題點

(1) 日本における陶淵明の「遊斜川幷序」に關する檢討

これより、日本における「遊斜川幷序」に關して檢討された論考の概要を、①都留春雄・釜谷武志『陶淵明』②石川忠久『陶淵明とその時代』③長谷川滋成『陶淵明の精神生活』④田部井文雄・上田武『陶淵明集全釋』、を出版年代の順に見ていくことで捉えておきたい。

①都留春雄・釜谷武志『陶淵明』鑑賞中國の古典第十三卷、一九八八年五月、角川書店

「遊斜川幷序」の譯注のあと、制作年代に關する問題を紹介し、その後、序と詩の構成を分析している。氏によると、序は、「詩の作られた背景を說明する」ものである。そして、詩の冒頭は「この斜川への遊覽を行った直接の動機」が書かれており、次の第五句から第八句までは「情景描寫」。つづく第九句から第十二句は曾城について、第十三句以降は「詩のテーマ」と關連している、という分析である。氏は、この作品を「詩の中に行樂の情景はもちろんあるものの、全體に底流する基調が、死への思いと悲哀である」とみている。また、氏は、「遊斜川幷序」を、「郊外などを遊覽してそこの情景に触發された思いをうたう詩は、魏晉のころから出現し始め、宋の謝靈運を代表として多くの作品が書かれ

るようになる。『文選』では「遊覽」の項に採錄される詩がそうであ」る。と述べ、さらに、陶淵明の「遊斜川幷序」や「時運」詩もその範疇であると述べている。

②石川忠久『陶淵明とその時代』第三節「遊斜川」考（一九九四年四月、研文出版）[1]

「遊斜川幷序」の制作年について、逯欽立氏の説を紹介し、それについて検討しているが、「遊斜川幷序」の具體的な内容の分析は行っていない。

③長谷川滋成『陶淵明の精神生活』（一九九五年七月、汲古書院）

「遊斜川幷序」の制作年についての検討は行っていない。その風景描寫に着眼し、序と詩とを分析している。序の「日月の遂に往くを悲しみ、吾が年の留まらざるを悼む」というのを本詩の「主意」とする。そして、詩の第五、第六句を「天候描寫」、第七から第九句を「長流の風景描寫」、第十句から第十二句を「曾城の風景描寫」としている。そして「中間の風景は、主意である推移する時間、短促な壽命を充實させ、また現在の生活や人生快樂を追究させてくれるものとして位置づけることができよう」と述べている。さらに、注の十九では、「『斜川に遊ぶ』詩と發想が近い詩として「蘭亭詩」の數々があげられる」と述べ、孫綽の後序を紹介している。

④田部井文雄・上田武『陶淵明集全釋』（二〇〇一年一月、明治書院）

「遊斜川幷序」の「補説」に、制作年代に關する從來の説を紹介し、さらにその後ろに「なお、その『斜川』の遊が、西晉の石崇の金谷園や東晉の王羲之の蘭亭の集いにならった點がうかがわれることからも、五十歳代の作とすべしとの

主張も展開され、この詩の作詩に關する論議は、未だ決着したとはいい難いものがある」と述べている。

（2）中國における陶淵明の「遊斜川幷序」に關する檢討

つぎに、中國における「遊斜川幷序」に關して檢討された論考、①逯欽立『陶淵明集』②郭維森・包景誠『陶淵明集全譯』③袁行霈『陶淵明集箋注』を、これも出版年代の順に見ていきたい。

①逯欽立『陶淵明集』（一九八七年二月、中華書局）

「事跡詩文繫年」には、「遊斜川幷序」の五十歳制作説をとる根據を中心的に論じている。斜川の遊びは石崇の金谷の會や王羲之の蘭亭の會の遊びを眞似、作品にしたものとする。

②郭維森・包景誠『陶淵明集全譯』（一九九二年九月、貴州人民出版社）

「陶淵明年譜」において、兩氏は「遊斜川幷序」の制作年代に關する諸説を紹介し、兩氏は李本に從う旨を述べる。王羲之の「蘭亭集序」が書かれたのが三十二歳の時で、そこに生死について書かれているから、「遊斜川幷序」で「わが生行々歸休せんとす（吾生行歸休）」といっても何の不思議なことなどない、と判斷し、陶淵明三十七歳制作説を支持している。

さらに同じく「題解」において、「遊斜川幷序」を王羲之の「蘭亭集序」と同じく「遊賞詩文」の類に屬すものと述べている。

③袁行霈『陶淵明集箋注』（二〇〇三年四月、中華書局出版）

その「析義」において、「遊斜川幷序」を陶淵明唯一の山水詩であるとのべ、その後に、この詩の構成について、「始めと終わりに歳月の移ろいやすいことに對する思い、中間は山水の風景について描かれている」と述べる。また、「蘭亭序」との相違について、「斜川の遊びは王羲之の蘭亭の遊びをおそらく眞似たものであり、「遊斜川序」と「蘭亭序」、「遊斜川詩」と「蘭亭詩」とがそれぞれ對應している。歳月の移ろいを悲しみ、人生の無常を嘆くという寓意は互いにとても似ている。だが、「遊斜川序」は初めから終わりまで、言葉を飾りたててはいないがよく練れており、「蘭亭集序」の抒情を述べ列ねているところは似ていない」と述べている。[2]

これまで日本と中國における、「遊斜川幷序」に關する論考について、主なものを取りあげた。これらを見た限りであるが、從來の「遊斜川幷序」に關する研究はその制作年代についての検討が中心であったことがよくわかる。ここに取りあげたもの以外の陶淵明詩の譯本において、日中を問わず、「遊斜川幷序」の制作年代に纏わる問題について多く取り上げられている。[3]

これまでの研究で、制作年代に關する議論はかなり行われたと言えよう。だが、内容に關する検討は、「遊斜川幷序」だけ單獨になされるか、または、その制作年代を確定するために行われたものであり、必ずしも深くなされたとは言えないようだ。

たとえば、「遊斜川幷序」に類するものとして、「蘭亭詩」、あるいは『文選』の遊覽詩があげられていた。だが、それらとどのように似ているかについて充分な検討はされていない。袁行霈氏が「遊斜川幷序」の構成について述べ、また、「蘭亭序」とその詩との比較を試みているのが筆者の目に止まった例外として擧げうるにすぎない。

小論では、袁行霈氏が試みた「蘭亭序」とその詩との比較をさらに進め、「遊斜川幷序」の内容の分析を行うこととする。

Ⅲ「蘭亭序」と「遊斜川序」との比較

①王羲之「蘭亭序」の構成

「蘭亭序」の全文は、三つの段落に分けることができる。[4] 第一段落は、いつ、どこで、だれと、集ったのかが詠まれている。そして第二段落では、宴が催された場所の景色や楽しさが詠まれ、最後の第三段落では、人生の短促についての悲しみが詠まれている。以下、第一段落から第三段落まで、まずその全體を見てみたい。

第一段落

永和九年、歳在癸丑。暮春之初、會于會稽山陰之蘭亭。修禊事也。羣賢畢至、少長咸集。

永和九年、歳癸丑に在り。暮春の初、會稽山陰の蘭亭に會す。禊事を修むるなり。羣賢畢(ことごと)く至り、少長咸(みな)集る。

序のはじめには、いつ、永和九年の春。どこで、會稽山陰の蘭亭。何を行ったのか、禊ぎ。誰と、多くの賢者や若者から年寄りまで、が詠まれている。

第二段落

此地有崇山峻嶺、茂林脩竹又有清流激湍、映帶左右。引以爲流觴曲水、列坐其次。雖無絲竹管絃之盛、一觴一詠、亦足以暢敍幽情。是日也、天朗氣清、惠風和暢。仰觀宇宙之大、俯察品類之盛。所以遊目騁懷、足以極視聽之娛。信可樂也。

此の地に崇山 峻嶺、茂林脩竹有り。又 清流 激湍有りて、左右に映帶す。引いて以て流觴曲水を爲し、其の次を列坐す。絲竹管絃の盛なしと雖も、一觴一詠、亦 以て幽情を暢敍するに足れり。是の日や、天朗かに氣清く、惠風和暢せり。仰いて宇宙の大なるを觀、俯して品類の盛んなるを察す。目を遊ばしめ懷を騁する所以、以て視聽の娛を極むるに足れり。信に樂しむ可きなり。

第二段落には、以下に大約を示すように、宴が催された場所の様子や宴の樂しさが詠まれる。

蘭亭は、高い山、險しい峰があり、茂った林には竹が生え、清らかで激しい川が流れている所である。そこに水を引いて流觴曲水の宴を開いた。音樂の華やかな演奏はないけれども、酒を飲み詩を詠い、心の思いを述べるだけでもう十分だ。今日はおだやかですがすがしく、あたたかな春風が心地よい。空を見上げるとこの世界の偉大さが目に入り、地上に目をやれば様々な物が生き生きとしているのが見える。自然の様子を見たり聞いたりすることはまことに樂しいことである。

第三段落

夫人之相與俯仰一世、或取諸懷抱、悟言一室之內、或因寄所託、放浪形骸之外。雖趣舍萬殊、靜躁不同、當其欣於所遇、暫得於己、快然自足、曾不知老將至。及其所之既倦、情隨事遷、感慨係之矣。向之所欣、俛仰之間、以爲陳迹。尤不能不以之興懷。況脩短隨化、終期於盡。古人云、死生亦大矣。豈不痛哉。每覽昔人興感之由、若合一契。

未嘗不臨文嗟悼。不能喻之於懐。固知一死生爲虚誕、齊彭殤爲妄作。後之視今、亦猶今之視昔。悲夫。故列敍時人、錄其所述。雖世殊事異、所以興懐、其致一也。後之覽者、亦將有感於斯文。

夫れ人の相與に一世に俯仰するや、或は諸を懐抱に取り、一室の内に悟言し、或は託する所 因寄して、形骸の外に放浪す。趣舍萬殊にして、靜躁同じからずと雖も、其の遇ふ所を欣びて、暫く己に得るに當たっては、快然として自足す、曾て老の將に至らんとするを知らず。其の之く所既に倦み、情事に隨て遷るに及んでは、感慨之に係れり。向の欣ぶ所は、俛仰の間に、以て陳迹と爲る。尤も之を以て懐を興さざる能はず。況や脩短化に隨って、終に盡くるに期するをや。古人云ふ、死生も亦 大なりと。豈に痛ましからずや。昔人感を興すの由を覽る毎に、一契を合せたるが若し。未だ嘗て文に臨んで嗟悼せずんばあらず。之を懐に喻ること能はず。固に死生を一にするは虚誕たり、彭殤を齊しくするは妄作たるを知る。後の今を視るも、亦 猶ほ今の昔を視るがごとくならん。悲しいかな。故に時人を列敍し、其の述ぶる所を錄す。世殊に事異なりと雖も、懐を興す所以は、其の致一なり。後の覽る者も、亦 將に斯の文に感有らんとす。

最後の第三段落には、以下に大約を示すように、人生のはかなさについての感慨が詠まれている。

人の一生は様々で、人の生き方には動靜さまざまあるが、だれでも喜ばしい狀態にある時には、その狀態に滿足して、老いが我が身に近づいてきていることに氣づかないものである。だが、その喜ばしい狀態に飽き、思いが移ろいゆくと、次第に感慨がわき起こる。さきの喜ばしい狀態にあったのはもうすでに過去のこととなっている。しかも命には長短があるが結局は盡き果ててしまうのだからなおさら心が動じてしまう。古人が「死生もまた大なり」と言っているが、なんとも悲しいではないか。古人も私のように感慨に耽っていたことを書物で見る度に、悲しくてたまらなくなる。私には死と生を一としたり、長壽と夭折とを同一視することなどできない。今、私がこうして昔の書物を見て感慨を起こす

ように、後世の人も今の私の氣持ちを汲んでくれることだろう。そこでこの會に參列した人たちの名を記しその作品を集めた次第である。後世の人もきっとこれらの作品を見て感慨を起こすであろう。

②陶淵明「遊斜川序」の構成

つぎに「遊斜川序」だが、この序も「蘭亭序」と同じく、三つの段落に分けることができる。第一段落は、いつ、どこで、だれと、集ったのかが詠まれている。そして第二段落では、宴が催された場所の景色や樂しさが詠まれ、最後の第三段落ではやはり、人生短促の悲しみが詠まれている。「遊斜川序」も一通り、第一段落から第三段落まで全體をみることにする。

第一段落

辛丑正月五日、天氣澄和、風物閒美、與二三鄰曲、同遊斜川。

辛丑正月五日、天氣澄み和やかに、風物閒(のど)かにして美しく、二三の鄰曲と、同に斜川に遊ぶ。

この第一段落には、「蘭亭序」と同じように、いつ（辛丑の正月五日）、どこで（斜川）、だれと（二三の鄰曲）集ったのかが詠まれている。

第二段落

臨長流、望曾城、魴鯉躍鱗於將夕、水鷗乘和以翻飛。彼南阜者、名實舊矣、不復乃爲嗟歎。若夫曾城、傍無依接、獨秀中皐。遙想靈山、有愛嘉名。欣對不足、率爾賦詩。

長流に臨み、曾城を臨む、魴鯉鱗を將に夕ならんとするに躍らし、水鷗和かなるに乗じて以て翻り飛ぶ。彼の南阜は、名實に舊し、復た乃ち爲に嗟歎せず。夫の曾城の若きは、傍らに依接するもの無く、獨り中皋に秀づ。遙かに靈山を想ひて、嘉名を愛する有り。欣び對して足らず、率爾として詩を賦す。

つづく第二段落も「蘭亭序」と同じく、宴が催された場所の様子（山や川の景色のすばらしさ）や宴の樂しさ（景色を眺めたり、詩を詠んで樂しむ様子）が詠まれる

第三段落

悲日月之遂往、悼吾年之不留。各疏年紀鄉里、以記其時日。

日月の遂に往くを悲しみ、吾が年の留まらざるを悼む。各々年紀鄉里を疏し、以て其の時日を記す。

最後の第三段落も「蘭亭序」と同様に、人生のはかなさに對する感慨を述べ、そして、參列者のそれぞれの年と鄉里を記している。

作品が三段落に分けられること、またその段落において中心となっている話題、第一段落は、いつ、どこで、だれと、集ったのかが詠まれ、第二段落では、宴が催された場所の景色や樂しさが詠まれ、最後の第三段落では、人生短促についての悲しみが詠まれるという點で「蘭亭序」と「遊斜川序」とはその構成が一致している。

「蘭亭序」と「遊斜川序」の構成の一致について、次の表において簡潔に示したい。

③「蘭亭序」と「遊斜川序」の比較

この表は、まず「蘭亭序」と「遊斜川序」を三つの段落に分けた。そして第一段落において、日時、場所、誰と何を行ったのかについてを示した。第二段落では、宴を行った場所の様子、そしてどの様な思いが如何に述べられているかを示し、第三段落では、人生短促の嘆き、記録がそれぞれどのように表現されているのかを示した。

第一段落

	日時について	場所	何をしたか	誰と？
蘭亭	永和九年、癸丑の歳、暮春の初	會稽山陰の蘭亭	禊→詠詩・飲酒	羣賢　少長
遊斜川	辛丑の年、正月五日	斜川	遊→詠詩・飲酒	二三の鄰曲

第二段落

	周りの様子	どのような思いか
蘭亭	崇山 峻嶺、茂林修竹、清流 激湍（山あり川あり）	視聽の娯を極むるに足れり信に樂しむ可きなり →樂しい
遊斜川	長流に臨み、曾城（曾城山）（山あり川あり）	欣び對して足らず、率として共に詩を賦す →樂しい

第三段落

	人生短促の嘆き	記録
蘭亭	死生も亦 大なりと。豈に痛ましからずや。	時人を列敘し、其の述ぶる所を錄す
遊斜川	日月の遂に往くを悲しみ、吾が年の留まらざるを悼む	各々年紀鄉里を疏し、以て其の時日を記す

兩者の構成が一致していることは明白である。この構成は「蘭亭序」よりも五十年前に詠まれた石崇の「金谷園序」にも見られる。[5] 段落中に若干の前後があるが、第一段落は、いつ（元康六年）、どこ（別廬河南縣の界の金谷澗の中）にいるかが書かれている。第二段落には、だれと（王詡、衆賓）と集ったのかが詠まれ、宴が催された場所の景色や樂しさ（或は高きに登り下（ひく）きを臨み、或は水濱に列坐す。時に琴瑟笙竹筑、車中に合わせ載せ、道路竝びに作す。…遂に各々詩を賦し、以て中懷を敍ぶ）が詠まれる。最後の第三段落では、人生短促についての悲しみ（性命の永からざるを感じ、凋落の期なきを懼る）が詠まれ、そして參列者たちについての記錄を殘す、という構成である。

この「金谷園序」の構成も內容も、「蘭亭序」、「遊斜川序」の二者と共通している。先に第二章でとりあげた諸說に、斜川の遊びは金谷園の集いや蘭亭の集いをまねたものであること、そのようすを描いた「序」に共通性があると述べられていた通りである。

では、詩はどうであろうか。殘念ながら、石崇により詠まれた金谷園の詩は殘っていない。王羲之の「蘭亭」には四

言詩と五言詩が殘されている。つぎに、その「蘭亭詩」と「遊斜川詩」とをみることにする。

Ⅳ 王羲之「蘭亭詩」と「遊斜川詩」との比較

王羲之の「蘭亭詩」は、四言詩と五言詩とがある。[6] 先に、四言詩の全體を示そう。

代謝鱗次　忽焉以周
欣此暮春　和氣載柔
詠彼舞雩　異世同流
乃携齊契　散懷一丘

代謝は鱗のごとく次なり　忽焉として以て周る
此の暮春を欣び　和氣　載ち柔らぐ
彼の舞雩を詠ずるは　世を異にして流れを同じくす
乃ち契を齊しくするものを携へ　懷ひを一丘に散ず

おおよその意味は、季節の移り變わりは魚の鱗のようにつらなりめぐっていくものだ。この晩春のやわらかな陽氣をよろこんでいる。遠い昔、『論語』の先進篇にも「舞雩」（雨乞いのうた）が詠まれているではないか。時代が違っても人は同じような思いを抱くものなのだなあ。心を同じくする者たちと一緒に、春のうたげを樂しみ、思いをはらすのだ、というものであろう。ここには、おだやかな春のようすと、その春をよろこび、そして樂しんでいることが詠まれている。

次に「蘭亭」五言詩は、[7]

仰眺碧天際　俯瞰緑水濱　　仰いでは碧天の際を眺め　俯しては緑水の濱を瞰む
寥朗無涯觀　寓目理自陳　　寥朗として涯無き觀め　寓目　理は自づと陳る
大矣造化功　萬殊靡不均　　大いなるかな造化の功　萬殊　均しからざるは靡し
羣籟雖參差　適我無非親　　羣籟參差たりと雖も　我に適ひて親しきに非ざる無し

空の彼方、川の流れ、この世の中の涯のないものをながめると、「理」がそれぞれにそなわっていることがわかる。「造化の功」は偉大であるなあ、この世の中のものは二つとして同じものはない。様々なものから色々な音が發せられるが、みな私に適いて心地よいものである、というものである。

この四言詩と五言詩の理解をめぐり、以下のような議論がある。

①四言詩は樂觀をうたう。五言詩は悲觀をうたう。（吉川忠夫『王羲之　六朝貴族の世界』一九八四年九月、清水新書、六十一頁）

四言詩はたしかに春のよろこびをうたうことに終始する。だが五言詩はたんなる樂觀であろうか。「大いなる造化の功」は、微少にして不安定な人間存在との對比のもとにうたわれているのではないか。

②四言詩も五言詩も樂觀をうたう。（興膳宏『亂世を生きる詩人たち』二〇〇一年十月、研文出版、三五五頁）

すでに見た羲之の二篇の詩（四言と五言詩のこと―三枝注）が春の喜びと遊宴の樂しい雰圍氣をうたうことに徹し

て、一點のかげりを見せない。

③四言詩も五言詩も悲觀的な要素が見られる。（川合康三『中國のアルバ』二〇〇三年四月、汲古書院、一〇七頁から一〇八頁）

五言詩については吉川氏の說に贊成し、さらに、四言詩は、中心となる感情は「春の喜び」、「集う樂しみ」であるが、「その春を、次々と移り變わる季節の周期の中で巡ってきたものと捉える態度は、この幸福な季節もまた束の閒のうちに過ぎ去ってしまうという感慨に連なる」そして「春は周期的に巡ってくるのに、それを享受する人は線狀の時閒軸の中で次々生起し消滅する」とのべている。

このように樂觀か悲觀かという議論がもちだされたのは、「蘭亭序」に流れる人生短促の憂いと、「蘭亭詩」二篇に流れる樂觀とがそぐわないことから「蘭亭序」の王羲之僞作說が生まれたという背景による。

だが小論において問題としたいのは、「蘭亭序」の王羲之僞作說についてではない。[8] また、四言詩や五言詩は樂觀を詠んでいるのか、それとも悲觀なのか、そのどちらかに決着をつけようとするものでもない。小論においては、「遊斜川序」と詩の構成と「蘭亭序」と詩との比較を通して、「遊斜川序」とその詩についての理解を深め、さらに陶淵明の文學の特徵について檢討したいのである。

問題となる「遊斜川詩」は次のようにうたわれている。

第一段落

開歳倏五日　吾生行歸休
念之動中懷　及辰爲茲遊

開歳倏ち五日　吾生行々歸休せんとす
之を念へば中懷を動がせ　辰に及んで茲の遊を爲す

第二段落

氣和天惟澄　班坐依遠流
弱湍馳文魴　閒谷矯鳴鷗
迴澤散游目　緬然睇曾丘
雖微九重秀　顧瞻無匹儔
提壺接賓侶　引滿更獻酬
未知從今去　當復如此不

氣は和やかに天は惟れ澄み　坐を班ちて遠流に依る
弱湍には文魴馳せ　閒谷には鳴鷗矯る
迴かなる澤に游目を散じ　緬然として曾丘を睇る
九重の秀は微しと雖も　顧瞻れば匹儔無し
壺を提げて賓侶に接し　滿を引いて更々獻酬す
未だ知らず今より去りて　當に復た此くの如かるべきや不やを

第三段落

中觴縱遙情　忘彼千載憂
且極今朝樂　明日非所求

中觴遙かなる情を縱にし　彼の千載の憂ひを忘る
且らく今朝の樂しみを極めん　明日は求むる所に非ず

「遊斜川詩」の全體をひとまず三つの段落に分けて示したが、それはそれぞれが次のような內容になっていると判斷されるからである。

まず、第一段落では、序に詠まれていた「人生短促の悲しみ」をそのまま續けて「吾生行々歸休せんとす」と詠む。

そして、その悲しみにより心（中懐）が「動」かされ、この「遊」びを行うことになったのだと理由が詠まれている。

つぎに、第二段落では、穏やかな日和、斜川の景観や遊びの様子が具體的に詠まれ、さらにその景観から引き起こされた思いが詠まれている。

最後に、第三段落では、酒を飲み、心が悲しみから解き放たれ、「彼の千載の憂い」さえも「忘」れ、今を楽しむことができたのだと詠まれている。

このように、内容上、三つに分けることができよう。

さて、その第二段落であるが、遊びを行っている所の周りの様子とその景観から引き起こされた思いが詠まれていると先に述べた。それは、先にみた「蘭亭詩」二首に相當する。すなわち「蘭亭詩」に詠まれている内容は「遊斜川詩」の第二段落の部分でしかない。言い換えれば、「遊斜川詩」は、「蘭亭詩」をベースとし、その前に第一段落、その後ろに第三段落を加えているということになるのではないかと考えられる。

このことを表に示すと次のようになる。

「蘭亭詩」四言	「蘭亭詩」五言	「遊斜川詩」
A	A	段落 1 開歳倏ち五日 2 吾生行々歸休せんとす

	1 代謝は鱗のごとく次なり 2 忽焉として以て周る 3 此の暮春を欣び 4 和氣 載ち柔らぐ 5 彼の舞雩を詠ずるは 6 世を異にして流れを同じくす 7 乃ち契を齊しくするものを携へ 8 懷ひを一丘に散ず	B
	1 仰いでは碧天の際を眺め 2 俯しては綠水の濱を瞰む 3 寥朗として涯無き觀め 4 寓目 理は自づと陳る 5 大いなるかな造化の功 6 萬殊 均しからざるは靡し 7 羣籟參差たりと雖も 8 我に適ひて親しきに非ざる無し	B
第一	落段 第二	落段
3 之を念へば中懷を動がせ 4 辰に及んで茲の遊を爲す	5 氣は和やかに天は惟れ澄み 6 坐を班ちて遠流に依る 7 弱湍には文鮪馳せ 8 閒谷には鳴鷗矯る 9 迴かなる澤に游目を散じ 10 緬然として曾丘を睇る 11 九重の秀は微しと雖も 12 顧瞻れば匹儔無し 13 壺を提げて賓侶に接し 14 滿を引いて更々獻酬す 15 未だ知らず今より去りて 16 當に復た此くの如かるべきや不やを 17 中觴遙かなる情を縱にし 18 彼の千載の憂ひを忘る	

第三

19　且らく今朝の樂しみを極めん

20　明日は求むる所に非ず

「蘭亭詩」二首について言えば、四言詩も五言詩も、一句めから四句めに會を催している所の景觀やおだやかな氣候、という周圍の狀況が詠まれる。そして五句めから最後の八句めにその景觀から引き起こされた思いが詠まれている。それは、「遊斜川詩」の第二段落の五句から十句が景觀、そして十一句から十六句までが思いを詠むものと同じものと見なしうる。このように「蘭亭詩」二首は、「遊斜川詩」の第一段落と第三段落に相當する部分がない。それは、「蘭亭詩」四言詩、五言詩の欄に、前者をA、後者をBとして示したとおりである。

「遊斜川詩」から言うと、三段落に分けたうちの、第二段落のその內容が「蘭亭詩」二首の內容と同じものと理解しうる。この第二段落の前後に四句ずつ付けられた第一段落と第三段落により、「遊斜川詩」は、詩の內部において感情表現が豐かになる效果が生じている。先にも述べたが、第一段落は、序に詠まれていた「人生短促の悲しみ」をそのまま續けて「吾生行々歸休せんとす」と詠む。そして、その悲しみにより心（中懷）が「動」かされ、この「遊」びを行うことになったその理由を詠む。第二段落では、穩やかな日和、斜川の景觀や遊びの樣子が具體的に詠まれ、さらにその景觀から引き起こされた思いが詠まれている。第三段落では、酒を飲み、心が悲しみから解き放たれ、「彼の千載の憂い」さえも「忘」れ、今を樂しむことができたのだと詠まれている。

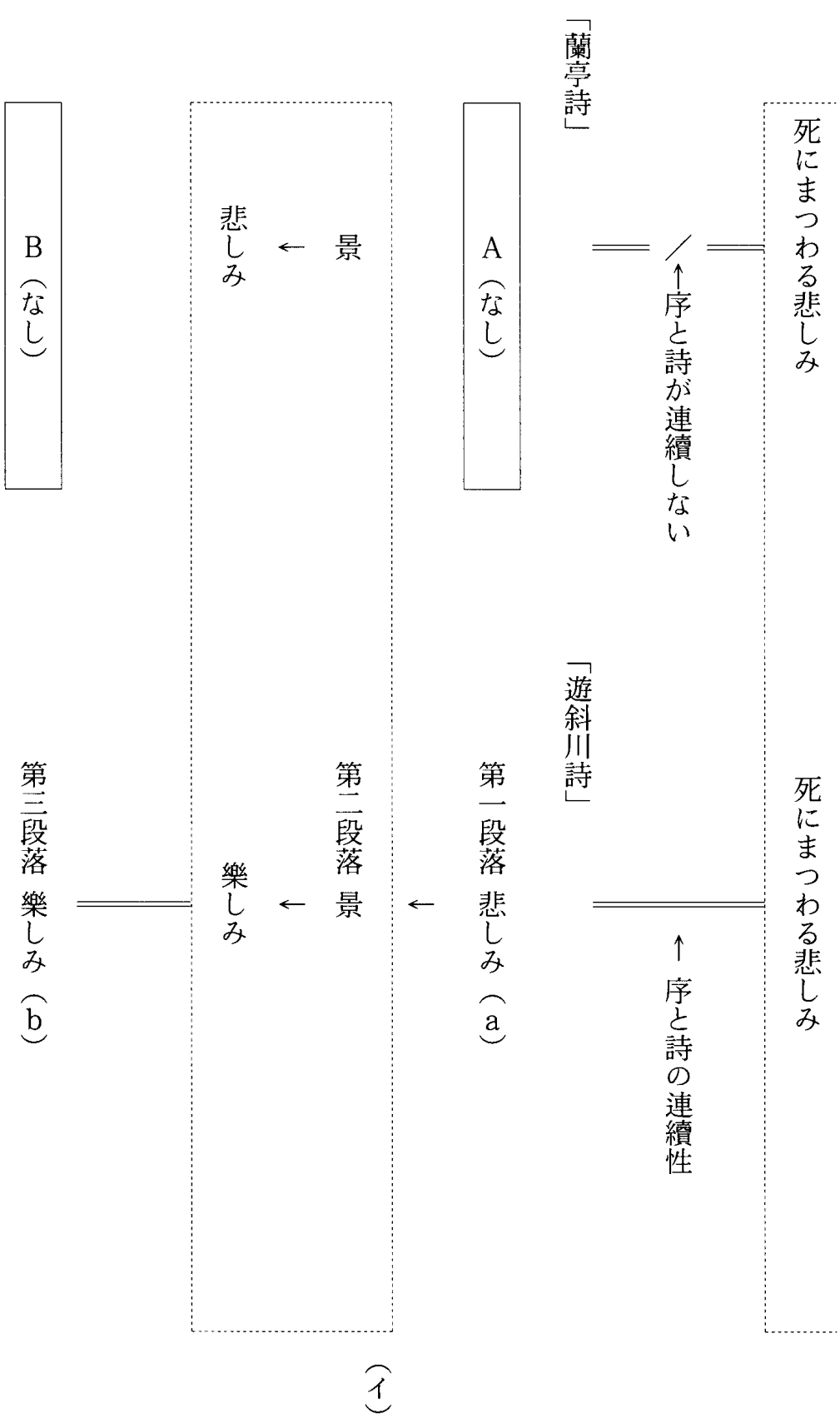
この感情の流れを簡單に示すと次のようになる。

序　悲しみ
←
第一段落　悲しみ
←
第二段落「遊」の様子。景觀から思いを起こす。（「蘭亭詩」はこの第二段落のみ。第一、三段落該當部分は無し）
←
第三段落　樂しみ

このように、序から詩を通してみると、「悲しみ」の情が、「斜川の遊び」により「樂しみ」へと變わっていったことがよくわかる。この構成を「遊斜川序」もふまえ、「蘭亭序」とその詩と比較すると、次のようになる。

「蘭亭序」	「遊斜川序」
景	景
←	←
うたげの樂しさ	うたげの樂しさ
←	←

（ア）



圖の點線で圍った部分の（ア）と（イ）は、「蘭亭序」と詩、「遊斜川序」と詩との共通部分を表している。

まず、（ア）だが、「蘭亭序」と「遊斜川序」の二つとも遊びが開かれている場所の景色を詠い、そして楽しさが極まると、やがて悲しみがわきおこることが詠まれている。つぎに（イ）は、「蘭亭詩」も「遊斜川詩」も景觀から感慨が詠まれている。

「蘭亭序」は、景觀から感慨が詠まれている。そして「蘭亭詩」も序と同じく、景觀から感慨を詠んでいる。つまり、同じパターンの繰り返しにより作品が構成されているのである。

一方、「遊斜川并序」は、まず、序は「蘭亭序」と同様、景觀から感慨が詠まれている。そして、詩の第一段落では、序の最後に詠まれていた死にまつわる悲しみをうけ、繼續してその悲しみを詠う。第二段落では、穏やかな日和、斜川の景觀、遊びの様子が具體的に詠まれ、さらにその景觀から引き起こされた楽しい思いが詠まれている。第三段落では、酒を飲み、心が悲しみから解き放たれ、「彼の千載の憂い」さえも「忘」れ、今を楽しむことができたのだと詠まれている。

このように「遊斜川并序」は（ア）（イ）のように「蘭亭序」と詩と同様の部分も見られるが、それだけではない。（a）（b）が加わることにより、序と詩の第一段落で詠まれていた「悲しみ」が、第二段落での「遊」びにより心が解き放たれ、第三段落において「楽しみ」が詠まれ、より豊かな感情表現をそこに見ることができるのである。

V おわりに

これまで「遊斜川并序」と「蘭亭序」詩との比較をおこなってきた。最後に結論として「遊斜川并序」の特徴を二點示すことにする。

「遊斜川」の序だけを詠むと、「蘭亭序」や「金谷園序」のパターンと同じであった。しかし、序に續いて詩を見ると、この「遊斜川」の作品全體が「蘭亭序」と詩とは異なることが認められた。また、從來のスタイルやモチーフを踏襲した部分と、そこから逸脱し、獨自のパターンを作りだしている部分とが認められた。この踏襲と逸脱の二面性がこの「遊斜川」の特徴と考えている。

もう一つの特徴として、「遊斜川」の中に悲觀から樂觀への變換がみられることも考えられる。「蘭亭」の場合、悲觀なら悲觀、樂觀なら樂觀だけが作品の中に詠まれていた。だが、「遊斜川并序」は、序と詩の第一段落で詠まれていた悲觀が、第二段落の「遊」により心が解き放たれ、第三段落では樂觀が詠まれている。そこに「蘭亭」よりも、より豊かな感情表現を見ることができるのである。

注

(1) 第三節「遊斜川」考は「陶淵明詩研究劄記―「飲酒」其五・「遊斜川」」(一九九二年三月、『二松學舍大學大學院紀要』「二松」第六號に初出。

(2) 袁行霈『陶淵明集箋注』(二〇〇三年四月、中華書局出版)「析義」の原文を以下に示す。

淵明多有田園詩、而山水詩僅此一首。首尾感歳月之易逝、中間描寫山水景物。「弱湍馳文魴」以下四句、描寫工細、上承玄言詩之山水描寫、下開謝靈運山水詩之先河。淵明斜川之遊蓋仿王羲之蘭亭之遊也、「遊斜川序」與「蘭亭集序」、「遊斜川詩」與「蘭亭詩」相對照、悲悼歳月之既往、感歎人生之無常、寓意頗有相近之處。惟「遊斜川序」樸實簡練、僅略陳始末而已、不似「蘭亭集序」之鋪陳且多抒情意味也。

(3) その一例を紹介すると、日本においては、一海知義『陶淵明』中國詩人撰集(一九五八年五月、岩波書店)・『陶淵明 文心雕龍』(一九六八年十二月、筑摩書房)、星川清孝『陶淵明』中國名詩鑑賞(原本一九六七年七月、集英社、一九九六年六月、小澤書店)、松枝茂夫・和田武司『陶淵明全集』(一九九〇年一月、岩波書店)などがあり、中國においては、王瑤『陶淵明集』

（一九五六年八月、人民文學出版社）、古直『陶靖節詩箋』（一九七四年十二月、廣文書局）、丁仲祐『陶淵明詩箋注』（一九七七年七月）龔斌『陶淵明集校箋』（一九九六年十二月）などがある。

「辛丑」を「辛酉」にする説、さらに「辛丑」は年ではなく日にちを表すとする説などがある。いずれも詩の「吾生行々歸休せんとす」の内容が、三十七歳時に詠むに相應しくないということから持ち上がった論爭である。

（4）下定雅弘氏は「蘭亭序をどう讀むか―その死生觀をめぐって―」（二〇〇四年三月、『六朝學術學會報』第五集）において、「蘭亭序」を三段落に分けている。第一段落は始めから「信可樂也」まで。第二段落は「夫人之相與」から「不知老之將至」まで。第三段落は「及其所之既倦」から最後まで。

興膳宏氏は『亂世を生きる詩人たち』（二〇〇一年十月、研文出版）において、「蘭亭序」を大きく二段落に分けている。第一段落は始めから「信可樂也」まで。第二段落は「夫人之相與」から終わりまでである。

（5）石崇の「金谷園序」は『世說新語』品藻篇の劉孝標注に見ることがでる。

第一段落、

余以元康六年、從太僕卿、出爲使持節、監青徐諸軍事、征虜將軍。有別廬在河南縣界金谷澗中。或高或下、有清泉茂林、衆果竹柏、藥草之屬、莫不畢備。又有水碓、魚池、土窟、其爲娛目歡心之物備矣

余は元康六年を以て、太僕卿從り、出でて使持節と爲り、青 徐諸軍事、征虜將軍を監す。別廬河南縣の界の金谷澗の中に在る有り。或は高く或は下く、清泉茂林有り、衆の果竹柏、藥草之屬、畢く備はらざるは莫し。又 水碓、魚池、土窟有りて、其れ目を娛しませ心を歡ばすの物を爲す物備はれり。

第二段落

時征西大將軍、祭酒王詡當還長安、余與衆賓共送往澗中、晝夜遊宴、屢遷其坐、或登高臨下、或列坐水濱。時琴瑟笙竹筑、合載車中、道路竝作、及住、令與鼓吹遞奏。遂各賦詩、以敍中懷。或不能者、罰酒三斗。

時に征西大將軍、祭酒の王詡長安に還るに當たり、余衆賓と共に澗中に送往し、晝夜遊宴し、屢々其の坐を遷し、或は高きに登り下きを臨み、或は水濱に列坐す。時に琴瑟笙竹筑、車中に合わせ載せ、道路竝びに作す、住まるに及び、鼓吹と遞ひに奏せしむ。遂に各々詩を賦し、以て中懷を敍ぶ。或は能はざるもの、罰酒三斗。

第三段落

感性命之不永、懼凋落之無期。故具列人官號、姓名、年紀、又寫詩箸後。後之好事者、其覽之哉。凡三十人、吳王師、議

郎、關中侯、始平武公蘇紹字世嗣、年五十、爲首。

性命の永からざるを感じ、凋落の期なきを懼る。故に具に人の官號、姓名、年紀を列ね、又 詩を寫し後に箸(あらは)す。後の好事者、其れこれを覽んや。凡そ三十人、吳王師、議郎、關中侯、始平武公の蘇紹字は世嗣、年五十、首と爲す。

(6) 王羲之の五言詩はこの他に四首ある。その四首を以下に示す。

一、生命に關する感慨。

悠悠大象運　輪轉無停際
陶化非吾因　去來非吾制
宗統竟安在　卽順理自泰
有心未能悟　適足纏利害
未若任所遇　逍遙良辰會

悠悠として大象は運り　輪轉して停まる際無し
陶化は吾が因に非ず　去來も吾が制に非ず
宗統は竟に安くにか在る　卽ち理に順ひて自ら泰かなり
心有るも未だ悟る能はず　適足するも利害纏ふ
未だ遇する所に任せ　良辰の會に逍遙するに若かず

二、死にまつわる感慨

猗與二三子　莫匪齊所託
造眞探玄根　涉世若過客
前識非所期　虛室是我宅
遠想千載外　何必謝曩昔
相與無相與　形骸自脫落

猗(ああ)與二三子　託する所を齊しくするに匪るは莫し
眞に造り玄根を探らん　世を涉ること過客の若し
前識は期す所に非ず　虛室は是れ我が宅
遠く想ふ千載の外　何ぞ必すしも曩昔(のうせき)を謝さん
相與にするも相與にする無し　形骸は自ら脫落す

三、一句から四句まで生き方の難しさを詠む。五句から十二句まで宴會のようすを詠む。

鑑明去塵垢　止則鄙吝生
體之固未易　三觴解天刑
方寸無停主　矜伐將自平
雖無絲與竹　玄泉有淸聲

鑑明らかなれば塵垢(じんこう)を去り　止まれば則ち鄙吝(ひりん)を生ず
之を體すること固に未だ易からずして　三觴を天刑と解く
方寸(ほうすん)は主を停むること無く　矜伐(きょうばつ)は將に自ら平らかにせんとす
絲と竹は無しと雖も　玄泉に淸聲有り

雖無嘯與歌　詠言有餘聲　　嘯と歌は無しと雖も　詠言に餘聲有り
取樂在一朝　寄之齊千齡　　樂しみを取るは一朝に在り　之れに寄せて千齡と齊しくせん

四、生命に關する感慨

合散固其常　脩短定無始　　合と散は固り其れ常なり　脩と短は定めて始無し
造新不暫停　一往不再起　　造新は暫く停まらず　一たび往けば再起せず
於今爲神奇　信宿同塵滓　　今に於て神奇と爲るも　信宿すれば塵滓に同じ
誰能無此慨　散之在推理　　誰れか能く此の慨無からん　之を散ずるは理を推すに在り
言立同不朽　河清非所俟　　言立つるは不朽に同じきも　河清(かせい)は俟(ま)つ所に非ず

(7) ここにあげた句の前に、「三春啓群品、寄暢在所因」が付けられているテキストもある。

(8) 「蘭亭序」が「臨河敍」だとしても、内容とパターンは同様であった。